

1. 出発前準備について

岡田英里香

出発前の準備に関してですが、持ち物は予想するほど必要ありません。

多くの人が一ヶ月の海外滞在は初めてで必要以上にスーツケースに物を詰め込んでしまうことと思うし、実際私もそうでしたが、スタンフォードは学生が多く住む地域なので当然生活必需品の類は現地調達が可能です。例として服やバス用品です。キャンパス以外にもいろいろな場所に行く機会が多く、必然いろいろなものを買って持ち帰ることになると思うので、スーツケースは空きに余裕を持って行った方がいいと思います。飛行機搭乗の際のスーツケースの重量制限が 23kg であるところ、私は帰り際には 24kg 弱ありました。

私は一応女性なので、以下は女性にしかあまり関係ないことではありますが、身だしなみ関連も当然いろいろと持っていきました。これがスーツケースを圧迫した一番の要因ですが、本当に最低限の化粧品以外は必要ありません。理由として、これらも現地調達が可能であることと、行ってみたらそういったことを気にすることがどうでもよくなってくるのが挙げられます。毎日授業における課題が出るので、平日はあまり暇ではないし、深夜や朝方まで作業することもままあり、そういったことに気を割くことはあまりないだろうと思います。わかっていても女性の方々は持っていきたくなることと思いますが、十中八九必要ありません。

総括して持っていくべきなのは、お金とクレジットカード、PC、筆記用具、最低限の衣類と日本食くらいのものだと私は思います。日本食が必要だと言うのは、食事の大半は寮近くの食堂で済ませることになりますが、食堂での食事はそうレパートリーが多いわけではなく私含め多くの日本人が日本食を恋しがっていたからです。ただし特に私たちが日本を好きすぎただけかもしれないので一般化していいのかは難しいところです。ともかくも振り返ってみれば必要だと思ったのはその程度なので、あまり気を張って用意しすぎず、身軽に行くことを推奨します。



2. 生活について

スタンフォードでの生活について

経済学部 2年 村田瑠璃子

● 1日のスケジュール

基本は午前中にある授業に合わせて起床します。人によってまちまちでしたが、授業開始が8:50と早いため、どんなに遅くとも8:00頃には皆起きていたように思います。朝食は7:30から開いている寮隣接のLagnitaというダイニングでとります。私は普段から早起きのため、6:30には起きシャワーを浴び、7:00には朝食をとっていました。同じく早起きをしていた人の中には、朝食の後にLagnita Diningの隣の大きな池の周りをランニングする人もいました。朝食の後には1時間程授業の準備をし、時にはJournal(宿題で出る日記)を書き溜めていました。授業は11:30頃終わり、コーディネーターによる昼食前のアナウンスメントの後、皆で昼食に向かいます。昼食になると少し時間に余裕もあるので、少し遠くに足を伸ばし、美味しいものを食べに行く人もいました。Stanford内にも、いくつかチェーンのレストランがありますが(SubwayやChinese Expressなど)、敷地を出てPalo Alto駅まで行くと、日本食レストランをはじめ、様々なレストランがあります。しかし敷地を出るまで徒歩で30分はかかるため、週に1回行けるか行けないかといった感じだったように思います。午後は自由時間が多くありますが、宿題をこなしたり、コーディネーターは準備してくれたイベントに参加したりと、暇な時間はなかったように思います。時に夜更かしをして日中睡魔が襲ってくる時もあり、午後に仮眠をとることもありました。夕飯をとる時間というのも人によりけりでし

たが、19 時にはダイニングがしまってしまうのが難点でした。食事を取り忘れてスーパーに買いに行く事もしばしばありました(笑)。就寝時間も人それぞれでしたが、プログラムの終わりが近づくにつれ、深夜までカードゲームやおしゃべりに興じるなど、夜更かしをしている人が多かった印象です。(時に夜更かしを繰り返し、朝授業時間に間に合わない人もいたようです(笑))

● 買い物について

寮から 5 分程のところに、Starbucks やコンビニなどの店舗が集合している建物があり、基本的に日用品などの買物はここで済みました。10 分程歩いたところには Bookstore があり、本に加えて Stanford グッズが所狭しと並んでいました。特にカリフォルニアは朝晩冷えるため、Stanford パーカーを購入し着用している人が多くいました。

● 勉強場所について

寮の部屋にも 1 人 1 つずつ机がありましたが、寮の中の共有スペースで勉強する人、図書館で勉強する人など、勉強場所は人まちまちでした。特に図書館については 15 分程度で行けるところが 2 つ (Green Library と Mayer Library) あり、どちらにも自習スペースが多くありました。(Mayer Library は 24 時間解放していましたが、私たちの滞在期間内に改築のため閉まってしまったので、来年以降利用できるか分かりません。) 私はそれ以外に外で寝転がってレポートを書いたりもしました。カリフォルニアの日中の温暖な気候は本当に気持ちが良く、多くの学生が外の芝生に寝そべて思い思いの時間を過ごしていました。



寮から 5 分程のところの Starbucks
ここにも毎日のように通いました。



論文印刷時に通った Green Library



Roble Hall (寮、2 階が男子、3 階が女子)



宿題が終わった頃に談話室で集まってゲーム。楽しかった思い出の1つです。

現地での生活について

商学部 2年 藤原周平

ALC プログラムの期間中は、大学内の寮で生活することになります。事前に一人部屋を希望するか、他国の生徒と同じ部屋での生活を希望するかの調査があります。僕の場合、一人部屋がよかったのですが4人部屋になってしまいました。このように必ずしも希望通りの部屋を得られるとは限らないようです。しかし、実際に他国の学生と一緒に部屋で生活することは、とても貴重な経験となりました。今では、4人部屋で生活できてむしろ良かったと思っています。僕の場合、日本人1人、中国人1人、台湾人2人の4人で生活することになり、当然部屋の中で日本語を使うことはなく、英語しか使えない環境であったため、部屋こそが最も英語を鍛えられた場であったかもしれません。ルームメイトとはプログラム終了後も頻繁に連絡を取るくらい仲良くなることができおり、他国の友達を増やすことができるというのも、このプログラムの魅力だと感じています。

このようにルームメイトに恵まれていた僕でしたが、基本的には部屋の外で過ごしていました。日中は授業終了後に友達とダウンタウンに出かけたり、アクティビティに参加したり、夜には寮のラウンジやロビーなどで、みんな集まりながら課題をしていたからです。これらの共有スペースは、皆が和気藹々と話しながら課題を進められるため、とても楽しい場所でした。

続いて、プログラム中の食事環境について説明します。基本的に寮に近接した食堂で

三食を済ますことになります。この食堂で食べられる料理は、あまり評判がよくありませんでした。ビュッフェスタイルの中で自分が食べたいものを選ぶことになりますが、お肉がパサパサであったり、味が薄かったりと、口に合うものが少なかった記憶しかありません。もっとおいしいものを食べたら、寮から数分歩いたところに、日本というフードコートのような劣化版があります。中華料理であったりサブウェイであったりと、食堂と比べれば数倍おいしい食事が手に入ります。また、ランチ時には、教室からの帰り道にあるタイ料理のお店に行くとよいかもしれません。そこで食べたグリーンカレーこそ、僕がキャンパス内で食べた最もおいしい食事でした。もし元気があれば、ダウントウンまで出て食事をするのがよいかもしれません。ダウントウンまで行けば、おいしいハンバーガーなどバラエティ豊かな食事を楽しめるでしょう。

プログラム中の生活において困ったことは、上記の食事に加えて入浴事情があります。部屋ごとにシャワールームが設置されているわけではなく、トイレと併設した共用のシャワールームを使用することになります。日本の家にあるような浴槽ではなく、一か月間シャワーのみで済まさなければならないので、僕のようにお風呂好きの人にとっては少々つらいかもしれません。

ここまで、寮生活について僕が感じたことを述べてきましたが、食事・入浴事情に我慢ができるのであれば、充実した生活を送ることができるでしょう。素敵な仲間に出会って、最高の一か月間を過ごすことができるはずです。



3. 授業について

法学部2年 大石真梨子

まず Stanford 到着後リスニングテスト（どちらかというと知能テストのような見た目の問題）と短い面接によって Section1~6 までのレベル別クラス約 10 人ずつに分かれます。ALC プログラムは平日毎日午前中に EC (Effective Communication) と TD (Topic Development) という授業があります。EC は英語での会話やプレゼンに重点をおき、各週金曜に小さな課題のプレゼンと、最終課題のために自分が選んだペーパーのトピックについてプレゼンをします。TD は最終課題のペーパーを書くために毎週少しずつ準備をしていく形態で、出される宿題をきちんとこなしていけばペーパーが最終期限に無事終わるようにプログラムされていると後から分かりました。

授業内容は日本の一般的な授業とは異なり、少人数なこともあって双方向授業で行われ、それぞれが発言をしようという主体性や積極性、チームでの活動では協調性が求められているように感じました。グループワークは決められたメンバー3 人で 10 分のプレゼンを行いました。（なかなかそろわない）時間を約束し意思疎通をはかり、仕上げるのは大変でしたが、発表し終わった達成感はひとしおで、メンバーからありがとうの長文 LINE が届いたのには感動しました。メンバーで深夜チョコレートを食べながらパワポを作ったのも良い思い出です。

また、自分が選んだトピックに関しペーパーを書く過程で、必ず街頭でのアンケート調査を行うことになりますが、さらに私は希望したので担当の先生がトピックに関する専門の Stanford の教授にアポを取ってくださいました。おかげで Stanford の社会学を専門とする教授にインタビューできとても幸運でした。

担当の先生とは授業後もメールですぐ連絡がついて、1 日 3 回もやり取りをしてくれるなど、行き詰まった時助けを求めれば必ず手がかりを作ってくれました。これは普段の日本の授業とは違って、このおかげでがんばることができたと思います。プログラムの最後には全てを加味して評価がつきますが、がんばったらその分だけしっかり評価してくれて、課題がきつかったがゆえに、真摯に取り組んだことを評価してもらえたというのはとても嬉しかったです。

私は Section4 でしたが、クラス構成は私一人日本人で Taiwan:7 China:2 Macau:2 Japan:1 でした。Taiwanese や Chinese は同じアジアの大学生とは思えないほど流暢に英語を話し堂々とプレゼンをするので初めは不安でたまりませんでした。彼らは率先してフレンドリーな雰囲気を作ってくれて、日本人一人でも自然となじみ積極的に参加できるようになりました。また全員母国語の中国語で会話できる中でもできるだけ英語で話す努力をしてくれていることをひしひしと感じました。もし逆の立場なら日本人は

みんな日本語でしゃべってしまうだろうに、と感謝と尊敬の気持ちでいっぱいでした。この春休み台湾に彼らを訪ねに行きますが、Section4 のみんなが今から観光の計画を立ててくれていると聞いていて、プログラムが終わってもなお特に Section4 のメンバーはかけがえのない仲間です。何よりも、寝ぼけ眼で（毎朝 9 時にはクラスが始まり、2 回欠席すると日本へ強制送還されるらしい…）クラスに行ったらもう誰一人として日本語が通じないので、なんとしてでも英語をしゃべらないと意思疎通すらできない！という状況に置かれたのは大変有り難い経験でした。また授業の後はほぼそのままランチなのですが、それもだいたい Section ごとに動くので、必然的に Taiwanese, Chinese たちと一緒に、気付くとさらに Taiwanese, Chinese たちの友達が増えテーブルを囲んでいました。というようにどんどん国籍を超えたアジアの友達がたくさんできました。これも授業の Section のおかげだったと思っています。

ALC プログラムの柱となる授業で得たのはその課題をこなせた力と自信だけではありませんでした。かけがえのない素晴らしい一ヶ月を支えてくれた先生と、共にがんばりまたプログラム後もずっと連絡を取り合える大切な仲間達は、私にとって一生の宝物です。



授業内容について

法学部 2 年 佐藤しおり

「あるアメリカ人が日本のレストランで緑茶を注文し、砂糖を添えてくれるよう頼んだ。しかし店員は『そんなことはできない』というばかりだった。いくら話しても埒が明かないので仕方なくコーヒーを頼んだところ、それには砂糖が添えられていた…。(砂糖、あるじゃないか!)」

これは、ある日のディスカッションの授業において用いられた“アメリカ文化”に関する文章の一部をまとめたものです。その日、私たちのクラスではこのような教材をもとに、「アメリカでは他の文化圏と比べ、選択肢が多ければ多いほど良いと考え、できる限り多くの選択肢（上の例では、緑茶に砂糖を入れるという選択肢）が認められることを欲する」という命題について議論を交わしました。さて、中国・台湾・日本の生徒がほぼ均等にいた私たちのクラスは、一体どのような結論に達したのでしょうか…。

ALCプログラムの授業は、上で示したように「考える」ことを極めて重視した内容となっています。その具体的な内容は以下の通りです。

まず、初日のテスト（聞き取り、面談）によって6段階のクラス分けがなされます。そして、クラスごとに担当の先生の下でディスカッションやプレゼンテーション、最終レポート作成等に向けた様々な活動を行います。

クラスはEC(Effective Communication)とTD(Topic Development)の2授業に分かれており、それぞれ担当の先生と授業内容が異なります。

ECクラスでは、ディスカッションを通して様々な表現を身に付ける、英語のことわざをもとに文化比較をする、といった「話す」ことを主とした授業が行われます。この授業の最終目標は「自分の研究について15分間のプレゼンテーションを行う」というものですが、私たちのクラスでは毎週ミニ・プレゼンテーションの課題（クラス内の自己紹介、自分の出身地の紹介など）があり、最終目標に向け、段階を踏んで視線の向け方や間のとり方、資料の出し方などといったプレゼンテーションのスキルを習得していくことができました。

一方のTDクラスは、最終週に提出するアメリカ文化に関するレポートに向けて、構成や論の展開の仕方などを学びながら構成骨子や原稿を作り、それについてクラス内でお互いの良い点や改善点を指摘しあうなど「書く」活動に重点を置いた授業になっています。また、こちらのクラスでは、様々な題材の文章を読んだりレポートの資料として用いる文献を要約したりするなど「読む」ことにも力が入れています。

さらに、授業とは別にアメリカ文化に関するレクチャーがあり、そのフィードバックとしてのディスカッションやゲームを行うクラスと、レクチャーの内容の理解度を測る小テストがあります。

ECクラス・TDクラスはそれぞれ独立して多様な課題が出されるので、時間を効率的に使って課題に取り組むことが必要となります。また、授業課題としてのプレゼンテーションの準備やインタビューなどは、他の課題や最終レポートの準備などとのバランスを考えながら「どれくらいの時間・労力を投入するか」という自己判断が重要となりま

す。授業以外にも様々なアクティビティがある中で、全ての活動に全力を注ぐということは物理的に、また体力的に極めて困難です。したがって、限りある時間や労力をいかに管理・調整していくかがプログラムを実り多いものとする鍵であると感じます。

すべて英語での授業、更には文化も母語も異なるクラスメートと1か月間ほぼ毎日共に学ぶということは、普段日本で大学生活を送る中ではほとんど経験しないものです。また、与えられた課題やテーマについて即座に自分の意見をまとめ、まとめた意見を発言し、相手の意見に対して何らかのリアクションをする、というのは思考の“瞬発力”を要します。そのため、特に第一週は環境の変化への順応が追いつかないこともあり、授業が極めてハードなものに感じられます。

しかしながら、絶えず何かを考え、発言し、意見を交換するということに一度慣れると、対話の多い授業はとても興味深く刺激的なものであるということが分かってきます。ALC プログラムの授業における最大の魅力は、この「常に考え、対話する」訓練ができる点にあるのではないのでしょうか。

さて、冒頭にお話しした「アメリカでは他の文化圏と比べて、選択肢は多いほど良いと考える（そして可能な限りの選択肢を要求する）」という命題の議論において、私たちのクラスはいかなる結論に至ったのでしょうか。それは、北京大学の学生である Eric のこの発言に集約されています。

「確かに、アジア人に対して緑茶に砂糖を入れるよう頼んだら頭ごなしに拒否されるかもしれない。だけど、アメリカでも、スターバックスでコーヒーを注文して『塩を沢山入れてくれ』と頼んだら、店員は『それは出来ません』って言うんじゃないかな？文化の差というのは、自分たちが思っているよりずっと小さいのさ！」





4. 観光について

経済学部 4年 森祐樹

平日の授業後と土日は基本的に自由時間だったので、スタンフォードの外に出かけることも多くありました。友達同士だけで行くこともあったし、コーディネーターらに連れられて大勢でぞろぞろ行くこともありました。行先は、スタンフォードから近くあるパル・アルトという町から、少し遠いサンフランシスコまで、という感じでした。パル・アルトには歩いていけるので、よくご飯を食べに行きました。サンフランシスコでは、フィッシャーマンズワーフやゴールデンゲートブリッジという有名スポットも見られました。土日にタクシー呼んでショッピングモール行ったり、サンフランシスコから終電を逃しそうになって焦ったりとかもありました。

コーディネーターが企画してくれるアクティビティの中にはアメフトや野球の試合、ミュージカルを見たりするものもありました。自由参加なので他のことをしていても大丈夫ですが、みんなで行くのも盛り上がったので、ぜひ参加すると楽しいと思います！特に野球はすごかったです！休日は積極的に観光して、思いっきり楽しんでください！



5. 企業見学・ボランティア活動について

社会学部3年 島田 堇

現地で用意された派遣先の企業はグーグルや YOUTUBE をはじめとした大企業からベンチャー企業まで非常に多岐にわたる分野の会社、かつシリコンバレーの技術力の高さがうかがえる会社ばかりでした。私が訪問した、small world という会社は google と提携しているベンチャー企業で、google glass の開発を主軸としていました。実際のオフィスの見学だけでなく、どのようなビジョンを持って仕事に取り組んでいるのかについてや、今見学している技術が実生活にどのように役に立っているのかについてまでも詳しく説明してくださり、普段では触らせてもらえないような試験中の機器も実際に使用させていただいてその技術を体感することもできました (google glass ももちろん実際に装着しました。)。シリコンバレーで発達しているいわゆる「世界最高峰の技術力」を実際に目の当たりにし、科学技術の発達を肌で体感してきた。この先どのような技術とともに世界が発達していくかは分からないが、その最先端は常にここで生まれる、

という技術職の方のお話を伺い、そのような場所で全力を尽くしている人たちのプライドも伝わり、今後の自分の社会の貢献の仕方を深く考えるきっかけとすることができた。